

鉄道人物伝

No.37

技術士制度に 貢献した鉄道技術者 平山復二郎



平山 復二郎
(ひらやま ふくじろう)

小野田 滋 / 情報管理部 担当部長

■ 鉄道建設への道

平山復二郎は、平山英三の次男として1888(明治21)年11月3日、東京市本郷区竜岡町(現在の文京区湯島)で生まれました。平山家は幕臣の家系で、父・英三は明治政府に出仕して特許局審査官兼農商務省意匠課長となりました。また、実弟(四男)の孝は東京帝国大学法律学科を卒業して鉄道省に入省し、のちに運輸次官、東京急行電鉄社長を歴任しました。

平山復二郎は、第一高等学校へ進学して野球部の名三塁手として活躍し、その後を水原豊(俳人の水原秋桜子)が継ぎましたが、のちに平山から「鼠を捕るようにゴロをさばけ」と指導された思い出を綴りました。東京帝国大学工科大学土木工学科へ進学し、1912(明治45)年7月に卒業して鉄道院に入庁し、建設部技術課勤務となりました。同年12月には志願兵として陸軍電信

隊第四中隊に入営し、陸軍工兵軍曹を経て除隊となりました。鉄道院に復職し、房総線建設事務所勤務となって、北条線(現在の内房線)木更津～館山間の工事を担当しました。また、1915(大正4)年と翌年の2回にわたって演習のために陸軍電信隊に招集され、除隊後に工兵少尉となりました。1917(大正6)年、大分建設事務所へ転勤となって日豊北線と豊肥線の建設工事に従事し、同年12月に技師に昇進しました。

■ 帝都復興院技師として

1919(大正8)年4月、鉄道省の発足にもなつて建設局工事課勤務となり、進歩的な土木技術者として評価の高かった太田圓三課長のもとで、工費用機械の導入に取り組みました。翌年6月には「隧道工事ニ関スル事項」を研究テーマとしてアメリカへ派遣され、さらにヨーロッパ各国を回って1922(大正11)年11月に帰朝して建設局工事課に復帰しました。

1923(大正12)年に発生した関東大震災の復興事業を行うための組織として帝都復興院(のち内務省復興局)が創設され、総裁に後藤新平が就任しましたが、後藤は復興事業にあたる土木技術者を鉄道省に求め、鉄道省から土木部長として太田圓三、道路課長として平山復二郎、橋梁課長として田中豊、隅田川出張所長として釘宮馨、経理部長として十河信二などが出向したほか、永大橋の基礎工事で用いられた圧気潜函工法の専門家として元鉄道院技師の白石多士良が事業に携わりました。平山は、道路課長として道路計画、道路工事、区画整理、用地買収にあたり、昭和通りや行幸通り、九段下の共同溝などを完成させました。

■ 丹那トンネルを経て大陸へ

平山は、1927(昭和2)年に鉄道省建設局工事課に復帰しましたが、この頃か



帝都復興事業で完成した東京駅前の
行幸通り

ら技術者にとって技術力だけではなく、法律、経済、倫理などの知識を幅広く持つことが必要であると考えようになり、早稲田大学の通信教育を受けて法律を学びました。1929(昭和4)年には岡山建設事務所長となり、三呉線(現在の呉線の一部)、福塩線、作備線(現在の姫新線の一部)、因美線、土讃線、牟岐線などの新線建設工事を担当しました。

1931(昭和6)年には米子建設事務所長を兼務しましたが、同年12月には熱海線建設事務所長となり、難工事で完成が遅れていた丹那トンネルの総仕上げを担当しました。丹那トンネルは、1918(大正7)年から工事が開始されましたが、大量の湧水と膨張性の地質に阻まれて工事はたびたび中断しました。また、工事によって丹那盆地の水源が涸れて農作物に深刻な影響をもたらしたため、平山は渇水対策に奔走し、静岡県庁の仲介を得るなどして補償にあたりました。工事は1933(昭和8)年8月25日に底設導坑が貫通し、1934(昭和9)年12月1日に熱海～沼津間が開業しました。平山は工事記録を後世に伝えるために、工事誌とは別に『丹那トンネルの話』を一般向けに編纂しました。

平山は、丹那トンネルの開通を目前に控えた1934(昭和9)年8月に本省建設局工事課長となり、1936(昭和11)年には仙台鉄道局長、翌年には本省建設局長に就任しました。しかし、戦火の拡大によって鉄道の建設は進まず、大陸に派遣する鉄道技術者の選任に忙殺されました。そして、平山自身も1938(昭和13)年に鉄道省を退官し、南満洲鉄道理事となって奉天市(現在の瀋陽市)に赴任しました。



丹那トンネルの「渇水救済記念碑」
(中央／静岡県函南町)

当時の満鉄には、内地からの天下り的な人事を好まない勢力も存在し、新線建設に対する軍部の専横もありましたが、平山はこうした雑音を意に介さず、「大陸浪人」を決め込んで短歌や海外文献の翻訳に没頭するなど自身の修養に努めました。平山はかつて志願兵として工兵少尉に任官していたこともあって1940(昭和15)年には在郷軍人会満鉄連合分会の分会長を勤めたほか、満洲土木学会会長に推戴されました。1942(昭和17)年に南満洲鉄道理事を任期満了で退任し、国策企業の満洲電気化学工業の理事長となって吉林市に移り、さらに1945(昭和20)年には満洲電業の理事長となって新京市(現在の長春市)に転居しました。

新京市で終戦を迎えた平山は、ソ連軍の進駐で混乱する中で新京居留民団の団長となって残留邦人の保護に尽力しましたが、発疹チブスを患い、2度投獄されるなどの辛酸をなめながら、1946(昭和21)年に引揚げ、疎開していた家族との再会を果たしました。

■ 建設コンサルタントの育成

帰国した平山は、白石基礎工事社長として丸ビルに事務所を構えていた旧友の白石多士良のもとで同社の相談役となり、ここに火曜会相談所を開設してかつての仲間たちと日本の将来について意見を交わす日々を過ごしました。その中で、外地からの引揚げ技術者の雇用を確保し、戦後復興に役立てる仕組み作りが急務であるという結論に達し、1946(昭和21)年に復興建設技術協会(初代会長は建築家の佐野利器)を設立して引揚げ技術者を雇用し、国の

1949(昭和24)年に只見川水系を視察した一行
前列左4人目がエリック・フロアー、左5人目がアントニン・レーモンド、後列左4人目が平山復二郎
(写真提供:パシフィックコンサルタンツ)



組織が直轄で行っていた調査業務や設計業務を専門に行う技術者集団を立ち上げました。復興建設技術協会は、東京駅八重洲口再開発や地下鉄丸ノ内線などの計画にあたり、1959(昭和34)年には地域会社に分割されて独立し、現在の「復建」の名前を冠した建設コンサルタント会社となりました。

当時、世界銀行の融資によって電源開発(只見川水系)や農業用水(愛知用水)の建設プロジェクトが推進されていましたが、海外のコンサルタントに設計を依頼することが融資条件であったため、アメリカのエリック・フロアー・アソシエーツ(EFA)社がこれを受注しました。その後、日本に滞在していた建築家のアントニン・レーモンドと鉄道省出身の平山復二郎、白石多士良らによって、EFA社との合弁会社として1951(昭和26)年にパシフィックコンサルタンツ・インコーポレーテッドをアメリカ法人として設立し、平山はその副社長となりました。1954(昭和29)年には日本法人としてパシフィックコンサルタンツが設立されて初代社長に就任し、黎明期の建設コンサルタント業界の育成にあたりました。

■ 技術士制度への貢献

1950(昭和25)年、経済安定本部産業局では、アメリカのコンサルティング・エンジニア制度にならって、技術力と倫理を備えた資格制度を設けるための検討を開始し、平山はその懇談会に招かれました。1951(昭和26)年には日本技術士会が設立され、さらに技術士法を制定して国家資格とすることをめざしました。平山は衆議院の特別委員会に参考人として招かれ、技術者に医師や弁護士に匹敵する資格を与えて社会的地位の向上を図るべきと主張しました。1957(昭和32)年には技術士法が制定されて技術士制度が発足し、平山は自らこれを受験して翌年には技術士に登録されました。

このほか、1953(昭和28)年には交通文化賞を授与され、1955(昭和30)年には日本国有鉄道津軽海峡連絡ざい道技術調査委員会委員となったほか、1956(昭和31)年に土木学会会長、1959(昭和34)年に日本技術士会会長に推戴されました。1961(昭和36)年秋に体調を崩して転地療養したものの回復せず、翌年1月19日に入院先の国立第一病院で逝去しました。

文 献

- 1) 鉄道省熱海建設事務所編：丹那トンネルの話，鉄道省熱海建設事務所，1934
- 2) アーチバルド・ブラック著，平山復二郎訳：トンネルの話，岩波書店，1939
- 3) 平山復二郎：トンネル(岩波全書106)，岩波書店，1943
- 4) 平山復二郎：技術と哲学，理工図書，1950
- 5) 平山復二郎：技術と生活，交通協会の会，1952
- 6) 平山復二郎：技術，交通協会の会，1958
- 7) 平山復二郎：随筆・土木建設に生きて，山海堂，1961
- 8) 平山復二郎記念刊行会編：平山復二郎君の思い出，石崎書店，1962
- 9) パシフィックコンサルタンツ社史編纂委員会編纂：未来を生む歴史，パシフィックコンサルタンツグループ，2002
- 10) 夏目賢一：初期の日本技術士会における二つの倫理規程，技術と文明，Vol.19, No.1, 2014